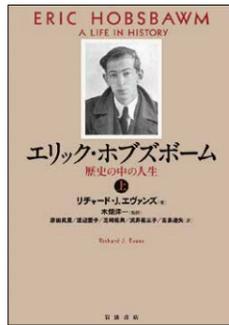


教員から学生への 推薦図書

大学図書館にある本から学生のみなさんに読んでほしい一冊を紹介していただきました。
普段あまり本を読まない学生さんも思わずぬい本との出会いになるかもしれません。



エリック・ホブズボーム 歴史の中の人生(上・下)

リチャード・J.エヴァンズ 著
木畑 洋一 監訳
(岩波書店 2021)

名図開架 289.3:H81:1~2

大川 四郎
法学部



本書は、イギリス人歴史家エリック・ホブズボーム(1917-2012)の伝記である。アウトサイダー(ユダヤ系、非パブリック・スクール出身)とはいえ、コスモポリタンの出自、戦時下の多感な学生時代を経て、世界的な経済史研究者にまでのぼりつめるまでのホブズボーム個人史が、イギリス情報部MI5(国内部門担当)による監視記録や、再婚までの異性関係、ジャズ評論家という側面、等々まで交えて、生き生きと描き出されている。傑作である。ちなみに、著者エヴァンズ氏は、ロンドン大学における同僚

の一人として、ホブズボームとも親交があったばかりか、ドイツ近現代史の歴史家としても知られている。原書は読みやすく、廉価版(英国リトル・ブラウン・グループのアバカス社より刊行)でも入手できる。



わたしを離さないで

カズオ・イシグロ 著
土屋政雄 訳
(早川書房 2008)

豊図第2書庫2階 933:173

安 智史
短期大学部

アニメーション作家の幾原邦彦が、2011年に制作したTVシリーズに『輪るピングドラム』があります。これはシリーズ後半、地下鉄サリン事件などをモデルに、生命の格差の問題などを問いかけた名作でしたが、第22話のラストで本書のタイトルが台詞に登場し、偶然なのか、それとも実際にこの本を意識したのか、気になっていました。近年になって、たまたま世田谷文学館刊行のパンフレット『hontowa』VOL.8(2020)で幾原氏が影響を受けた本の1冊として本書にコメントしているのを目にし、偶然ではなかったと確認できました。「これは並行世界ファンタジーの可哀想な子どもたちの話ではない。私たちの生きる世界にたしかに存在する現実なのだ」という幾原氏の言葉に共感します。



自由になるための技術 リベラルアーツ

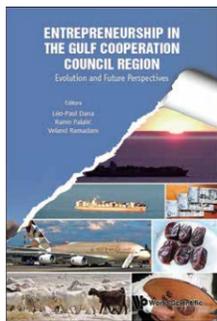
山口周 著
(講談社 2021)

名図開架 002:Y24

塚本 恭章
経済学部



現代の人間社会はかつてなく多くの難題に直面し、それらを解決・突破していくための「武器(=知的戦闘力)」が欠かせない。著者はそれぞれが「リベラルアーツ」であり、本書では「自由になるための技術」と表現されている。リベラルアーツは狭量なテクニックや教養をけっして意味しない。それは「疑うべき常識」を見抜き、「真理」を知るためのしなやかな感性と美意識を尊重する。哲学や古典・歴史など普遍的な(知)はその代表だ。人間(自分)とはいかなる存在であり、いかに未知なる未来を生き抜いていくべきか。リベラルアーツは「自己認識」を深める武器にもなる。哲学や歴史・宗教、美術など多分野に及び第一線の論客らとのきわめて刺激的な「対談」が本書で展開されている。領域横断的な対談が可能なのは、各氏がまさにリベラルアーツの実践者にほかならないからだ。読者は本書をつづいて学問・学術の圧倒的な知的拡がりを感じてほしい。



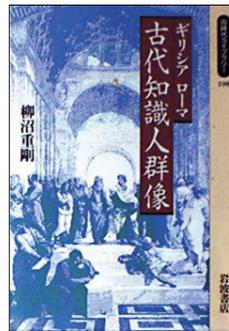
Entrepreneurship in the Gulf Cooperation Council Region: Evolution and Future Perspectives

Léo-Paul Dana,
Ramo Palalić and Veland Ramadani 著
(World Scientific 2021)

名図研究 335.13:D35

大北 健一
経営学部

『章編』47号で、*Entrepreneurship in Western Europe: A Contextual Perspective*をもとに西ヨーロッパ各国・地域の長い歴史をふまえながら Entrepreneurshipについて学べることをご紹介いたしました。図書館で実際に手にとってご覧になってもらえたら、21もの西ヨーロッパ各国・地域のケースが独立した各章で記述されていることから、各国・地域における Entrepreneurshipの独自の展開について認識を深められることを実感してもらえることでしょう。今回ご紹介する推薦図書では、GCCに加盟するアラビア半島の6つの産油国のケースが同様に独立した各章で記述されています。ぜひ各国の歴史をふまえながら、各国の諸事情や Entrepreneurshipの実情について多くを学んでもらえれば幸いです。



ギリシアローマ 古代知識人群像

柳沼重剛 著
(岩波書店1994)

豊図文庫岩波同時代ライブラリー 283.1:Y53

外部書庫 O80:D83:198

下野 正俊
文学部



学生時代に読む「古典」は、今後の皆さんの生涯を導く燈火となることでしょう。そうした書物には当然著者がいます。古典の著者という一人の優れた「人間」に関心を向けるということも、また読書の一つのあり方です。本書は、古代ギリシャ、ローマ時代(古典古代)の著者たち10人を取り上げ、彼らがそれぞれの時代の「危機」にどのように対処したのか、紹介するものです。古典古代は、文明の勃興から民主主義の発展と墮落、巨大帝国の成立とその崩壊、とおよそ人類の経験のすべてが詰まった時代です。危機も多く到来しました。そうした危機に対して一級の知識人がどのように身を処したか、ということが、達意の名文で記されています。私は自らの決断に迷ったとき、実は本書、特にキケロを扱った章をよく読み返しています。



コロナ対策禍の国と自治体 災害行政の迷走と閉塞

金井利之 著
(筑摩書房 2021)

豊図文庫ちくま新書 498.6:Ka44

鄭 智允
地域政策学部

本書は、2020年の日本の国と自治体の行政を、コロナ対策を切り口に分析を試みている。政府は、コロナ対策として蔓延防止重点措置、緊急事態宣言を繰り返したが、一向にコロナが収まる気配がない。コロナ対策は、蔓延防止とともに、蔓延防止措置自体による経済の失速を食い止めるための活性化策を同時に実現しようとする二律背反のもので、これがコロナ「対策禍」として国民の生活に「閉塞感」をもたらす元凶ともなった。この状況の中、感染症を災害とし、災害対策には権力集中が必要であるという考えを持つ人がいるが、筆者はその考えには留保が必要であると指摘する。コロナ禍を生きる我々は、この経験をどのように活かすことができるだろうか、その意味をもう一度考えるため、学生諸君にはぜひ手に取っていただきたい一冊である。



2030年 すべてが「加速」する世界に備えよ

ピーター・ディアマンディス、スティーブン・コトラー 著
土方奈美 訳
(ニューズビックス 2020)

名図開架 504:D71

伊藤 博文
法科大学院

未来はいったいどのようなものになるのか、その未来に私はどのように対応したらよいのか、考えたことはありませんか?いま、日々進化している様々なテクノロジーが“融合(convergence)”することによって、未来の大変化は予想より早くやってくると、この本は教えてくれ、この先10年のビジネス・産業・ライフスタイルがどのように変化していくリアリティを持って語ってくれます。人は未来を予測することが好きです。だからさまざまな未来予測が巷にあふれています。その中でも、未来に希望が持てる予測はそんなに多くはありません。この本は、テクノロジー社会の闇の未来に一筋の光を照らし出してくれる知識を与えてくれます。



百年戦争 中世ヨーロッパ最後の戦い

佐藤猛 著
(中央公論新社 2020)

豊図文庫中公新書 230.46:Sa85

吉川 剛
現代中国学部

本書は中世末期におけるイングランド王とフランス王との争いを主題とする。ヨーロッパ中世とはおよそ千年の長きにわたる時代であったことに、改めて気づかされた。王国とは何か、王位継承や身分制議会(模範議会・三部会・帝国議会など)、国王と諸王・諸侯・貴族・騎士との関係、臣従礼と領土、領主裁判権と国王裁判権、王権と教皇権、恒常的課税と徴税など、さらには時代区分について思索を深めるのも一興である。各章のはじめには、主たる登場人物がまとめられており、また理解を助けるための図版も多く示されている。関連する事項やキーワード、思い至ったことを調べたり、年表などで確認しながら、時には逸読しながら、じっくりと熟読玩味することを薦める。



みんなの「わがまま」入門

富永京子 著
(左右社 2019)

豊図開架 309:To55

吉本 篤子
国際コミュニケーション学部

自分の不満や自分の権利を強く主張する人に対して「わがまま」とか「自己中」と思うことがありませんか?そうした「わがまま」は、私たちが普段の生活のなかで経験する苦しさや困りごとに対する意義申し立てでもあり、私たちが「ふつう」と思っている社会的な制度や私たち自身のものの見方に改善を求めるものでもあることを、この本は教えてくれます。読み進めるうちに「わがままを言ってもいい」、つまり自分がおかしいと思うことに対して声をあげてもいいんだと気づかされます。でも声をあげるなんてこわい、という人には、各章末にあるエクササイズがおすすめです。自分と周りの人との違いに気付いたり、「わがまま」をどう聞いたり言ったりすればいいのかを考える手助けになります。